

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2023年 7月 8日	
所属部局・学年	野生動物研究センター
氏名	小川あゆみ

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
愛知県 犬山市 公益財団法人日本モンキーセンター
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
野生動物・動物園科学実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2023年 6月 23日 ~ 2023年 6月 25日 (3日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
野生動物研究センター：山本准教授 日本モンキーセンター：新宅氏、赤見氏、高野氏、綿貫氏
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の野生動物・動物園科学実習では、公益財団法人日本モンキーセンターにおいて、日本モンキーセンターの歴史や博物館としての動物園の存在意義について実践的に学習を行った。
○スケジュール 6/23 AM：動物園の歴史、意義、展示についての講義 PM：動物園内の観察 6/24 AM：標本実習 6/25 AM：飼育実習 PM：動物園教育、博物館学レクチャー
○成果 ●日本モンキーセンターについて 公益財団法人日本モンキーセンターは1956年に霊長類の研究施設として開設された。現在では、生きた霊長類が55種745頭飼育されており、霊長類の飼育種数、飼育頭数共に世界屈指の動物園である。日本の多くの動物園では死んだ個体は処分されるのが通常であるが、日本モンキーセンターでは博物館的観点から、開設された当初から死んだ個体の骨格標本が全て保管されている。
●動物園の歴史、意義、展示についての講義 日本モンキーセンターの歴史についての講義では、約80頭のヤクザルを太平山に放つ展示やアヌビスヒヒの低い柵の設置のみでの展示など、安全面や外来種問題の点から今では考えられないような展示方法で動物を展示していたことに衝撃を受けた。綿貫氏の講義では、主に展示の種類についての説明を受けた。動物園や水族館の展示は、形態展示、生態展示、行動展示の3種類に大別されていることを学んだ。
●動物園内の観察 初日の午後は綿貫氏に案内のもと、園内散策を行なった。専門家と回る動物園は非常に楽しく、時間をかけすぎて閉園時間までに全ての展示を回りきることはできなかった。アジア館では、動物たちの食事の様子を観察した。柵の上から食事を与えることで動物たちが食事に時間をかけ、且つ個体間で争いが起こらないようしている工夫されているところを見ることができた。Waoランドでは、ワオキツネザルの群れが広い敷地を自由に動き回っている様子を身近で観察した。群れで自由に動いている様子を観察することで、群れの順位関係や、個体ごとの特徴を詳しく知ることができ非常に面白かった。ゴリラの展示では、様々なところにエサを配置することでゴリラが何もしない時間を短くしたり、限られたスペースで飼育員の方々が工夫しているということを知ることができた。他にも、テナガザルやリスザルの展示も見て回り、飼育されている個体の特徴などによって展示方法を変えることによって、来場者にその動物の持つ特徴を分かりやすく伝える工夫がされていることも知ることができた。一方で、ヒヒの城やモンキーバレーのようなエンリッチメントの低い展示も見受けられた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

●標本実習

標本実習では、JMCで死んだ個体の処理について新宅さんに教えて頂いた。JMCでは、今までJMCで亡くなった動物全ての骨格標本を保管しているらしく、現在4000個体以上の骨標本が保管されているようだ。最初に、死亡したワオキツネザルの解剖を見学した。その後、皮膚と余分な筋肉を削いだ物を袋に入れ数ヶ月水につけて骨のみの状態にするようだ。その後、鍋に骨を入れ煮込んで乾燥させて骨格標本が完成する。骨が形成しきっていない幼体は、骨標本を作ることができないため、ホルマリン漬けにして保管されていた。骨格標本を保管している部屋では、剥製、ニシローランドゴリラの頭蓋骨、ワオキツネザルの毛皮、霊長類に関連する文化的資料などを拝見した。実習の最後には、骨の標本を部位ごとに分類し袋詰めする作業を行なった。各部位の骨の状態や虫歯の後をじっくりと観察することで、生きていた時の健康状態や年齢を推定しながら分類を行なった。

●飼育実習

飼育実習の前半は坂口さんの案内のもと、スローロリス保全センターでの餌やりを見学させてもらった。スローロリスは夜行性であるため日中は部屋が暗く、見つけることが難しかった。保全センターにいる個体は、霊長類の中でも非常に小さく体調が日々変化しやすいため、最善の注意を払って飼育しなければならないようだ。

スローロリス保全センターを見学した後は、2組に分かれて飼育体験を行なった。私は、チンパンジーやゴリラがいるアフリカセンターの飼育実習に参加した。キーパーである田中さんに教えていただき、チンパンジーの餌作り、夜行性サルの餌やり、ゴリラの飼育室の掃除を行なった。夜行性のサルは、固形飼料のペレットやココロギを1日に2回与えているようだ。ゴリラの飼育室はとて広く掃除は大変だったが、臭いはそこまで気にならなかった。田中さんによると、この掃除の時間に前日のエサの残り具合やうんちの状態、血が落ちていないかをチェックしたり、掃除後のエサの時間の行動をチェックすることでゴリラの健康状態を確認しているようだ。野生動物は痛みに強く限界まで痛みを我慢するそうなので、日々のキーパーさんの細かい健康管理のおかげで、私たちは動物園で色々な動物を見て学ぶことができているのだと再認識した。

アフリカセンターで一連の業務を体験させていただいた後、新アフリカ館でも作業を行なった。新アフリカ館では、動物が外のケージに出ている間に、中のケージの掃除やエサの準備を行なった。新アフリカ館にはバタモンキーやマントヒヒ、マンドリル、アビシニアコロブスがあり、ゴリラの部屋とは打って変わって、うんこが床に擦り付けられていたりして非常に汚かった。各部屋を掃除した後、ケージに餌を配置した。餌は種類や年齢によってエサの種類や大きさが工夫されていた。また、複数の個体がいるケージでは、エサの置き方も地位の低い個体も平等に食べられるように場所を分けるなど、キーパーの方の細やかな工夫を知ることができた。

●動物園教育、博物館学レクチャー

3日間の実習の最後は、赤見さんによる動物園教室のレクチャーと高野さんによる博物館学のレクチャーを受けた。赤見さんのレクチャーでは、前半に座学、後半には展示動物を決めてビジターの方がどれほど対象動物に対して関心を持っているのか、どんな関心を持っているのかについて実際にフィールドに出て調査を行なった。私はモンキースクランブルにて、フクロテナガザルを対象動物として来場者がどのような点に関心を持っているのかを会話から調査し、滞在時間を記録した。私が観察している間、フクロテナガザルは遊具に腰をかけて座っている時間が長かった。こうしたブラチェーションを目玉に展示設計されているブースにおいて、ブラチェーションをしていない時というのは、かなり展示としての存在感が薄くなってしまふのか素通りしてしまう来場者が多いように感じた。

高野さんによる博物館学のレクチャーでは、博物館として動物園が持つ役割について学んだ。キュレーターの方が学問と市民の橋渡しとして、様々なプログラムを実施し、小学生から大人まで対象によって伝え方を工夫することで、博物館としての価値を高めていることを知ることができた。

○まとめ

今まで動物園や水族館に行った際に、動物に注目して展示などにそこまで関心を持って見たことがなかった。しかし今回の実習を通して、キーパーの方やキュレーターの方など動物園に携わる方から色々とお話を聞くことができ、また動物園の裏側の仕事も体験させていただいたことで、今までとは違う視点で動物園を見つめ直す機会となった。日本モンキーセンターだけでなく、全国の動物園が、動物の種数や個体数の減少、動物福祉の問題や来場者数の問題、建物の老朽化など様々な問題に直面している現状、限られた予算の中で様々な工夫をこらし、より良い動物園作りに尽力されている動物園の努力を知ることができる貴重な経験となった。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



写真1：チンパンジーのエサ準備



写真2：エサを食べるマントヒヒ



写真3：ヒヒの城



写真6：エサを食べているゴリラ



写真4：骨格標本の整理



写真5：モンキーバレーの様子



写真7：Wao ランドの様子

※メンター（PWS プログラム指導教員）が確認済の報告書を【report@pws.wrc.kyoto-u.ac.jp】宛にご提出ください。

6. その他（特記事項など）

3日間実習を引率してくださった山本先生、貴重な経験や学びを提供してくださった日本モンキーセンターの皆様へ感謝申し上げます。